

特42
452

空梅东
寺小水
当
高砂

255
154

074988-001-9

特42-452

[金春流謡本]

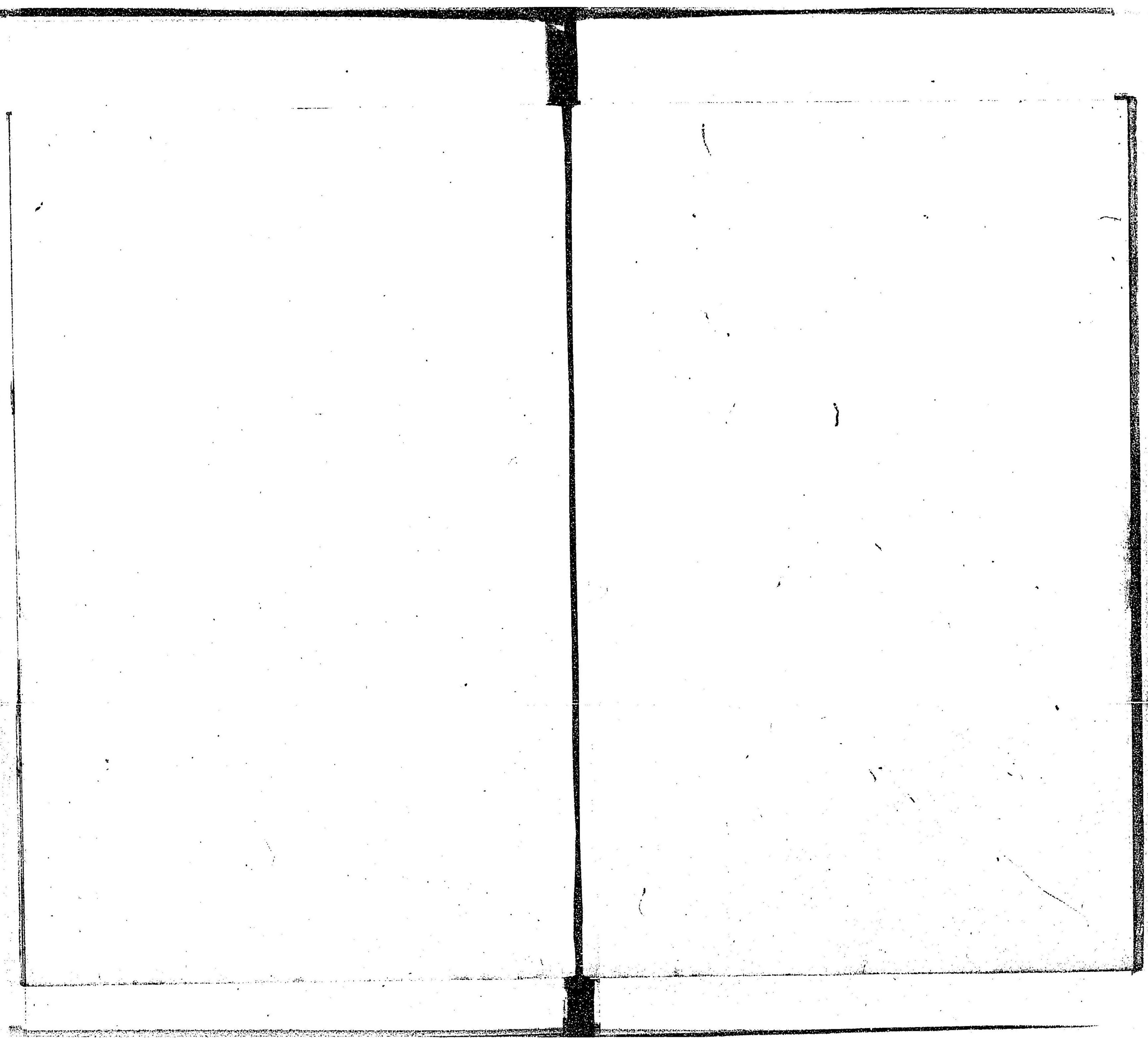
1-9, 11-15, 17-26

金春 七郎/著

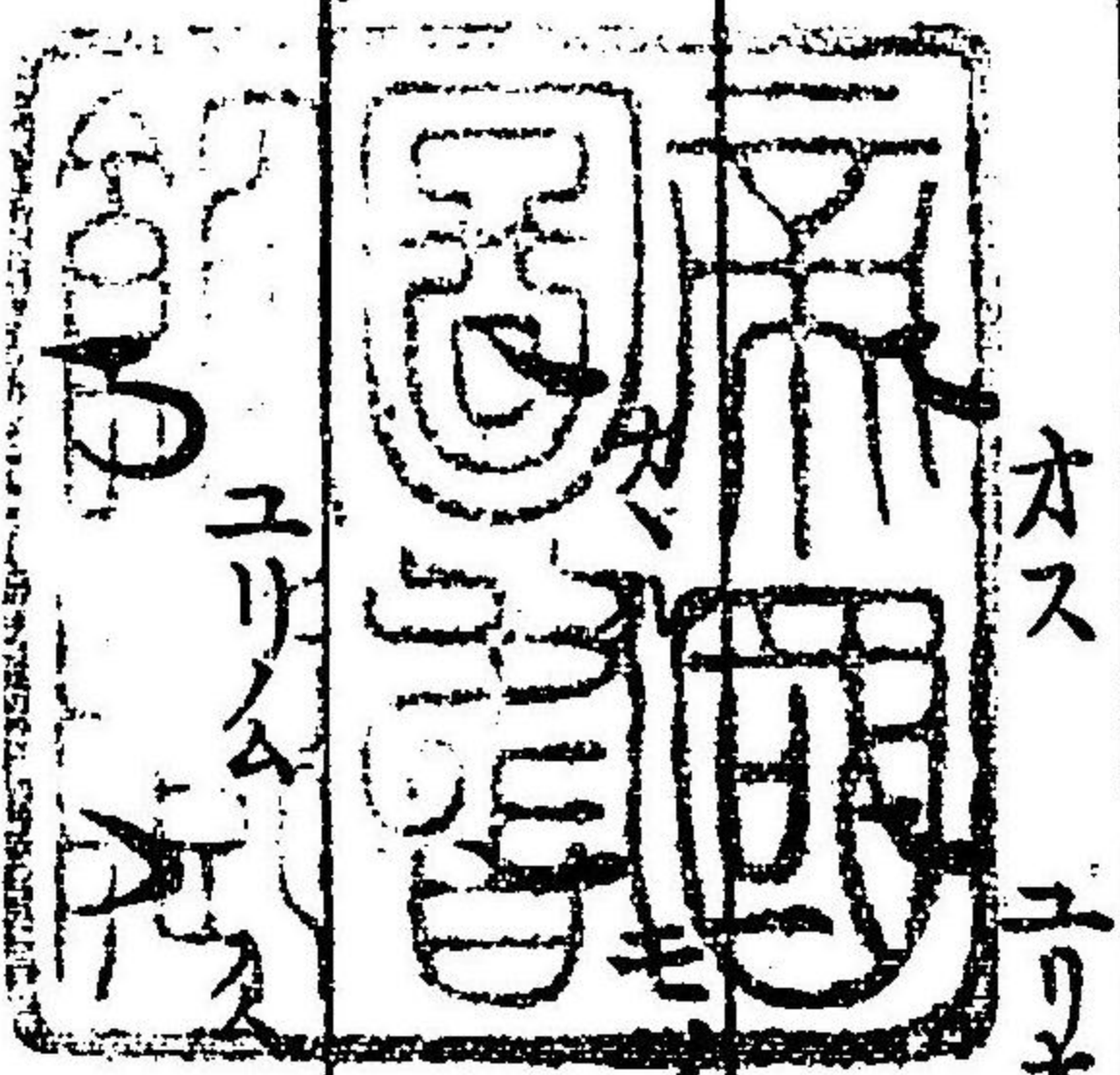
M40-41

CEL-0887





曲譜凡例



オス

ユリクス

ユル

中スル

ヲル

アタル

引又ハ引下ケ
ハ引オスハ入ル

母音ヲツミ
アテル
ト同上
ソ母音ヲ下ル
下同上

一字ヲ
キル
キソ
ナオス
ロ呂
句切

息ツキ
切テ不切
ミラル
ハミル

弓 強吟
糸 和吟
中吟

明治
41 8 1
内交

聲付

ヤラハ ヤラ ヤアヤ

内ノ拍子

内ヤハ 内ヤラ 内ヤ

トリ オクリ 片地

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

高砂

羊三倉吹舟

今をとりては旅衣の

そひきしき 折是を九お紀はの

河 國阿蘇宮乃神主友成とい物なり

河 河 河 都さるる箱まけ春田の

初めのうらなふまじ序なれハ播別

高砂豊浦よもい息かみの存作

まよに國へつゝ相生のむねも語可
國おく謂なる昔の人のまよ
是の目出度代の譬也高砂と云ふ
此代の美草集のいふ乃義後昔
まよの今に比代は位給ふに昔の比
まよのまよなるまよの集のまよ
まよの古今あはれいと比代は昔のまよ

たどなり能く國ハ有難やとて
不審なるの目もまよのまよ西の
海のかつこもまよのまよ高言砂
まよの名もまよのまよのまよ
静まよの國も治まる時仲同枝とあ
まよの代なれやあはれ相生れまよ
まよのまよのまよのまよのまよ

五
もあつるや新の世よしの世に豊
なる君の恵に有難お念
砂の松は同出慶にんせ給ふまは
く 懇ニテはまよふたかきあつて
来さ海なごりかきを在入の世
たぐひ陽春の徳をよほく南
校をよめて用へテ 慈チをたかむ

其は阿彌ろたのちしに松葉を
四の時をよめし千年若
色雲の中よまぐは松花の色十
のニあまのちかき
松のの松の葉の葉の葉の葉
たねのちかき
敷島ニのちかき

長能ら初らも有情に情を甚く
又か音のもたれ事なり草花出砂
風聲水音迄萬物をたむびけり
去の村の東風の動き秋は去の地
露のなぐも和歌のすむあはれ
中も此れに著る勝きて十八公
のまじり千條に緑となりて古今

た色なきは始皇の山嶽にあはれ
新のたなりもて美園も本朝の
も萬氏是れ賞殿も高砂に尾上
の鐘の音すあり 暁くけて霜を
たきも松の葉の葉色にあはれ
こころのまじりけの朝夕のけり
あらしのあはれはあはれなり松の

葉はちりつらむかほ〜色にむかふまほ
まろ〜つ〜あき代のた〜なるを
常盤樹の中あも名を高敷の末
代のた〜り〜も相生の陰う久〜きか
夏あみ〜あ〜松の枝〜老あ
〜題〜して其あ〜あ〜あ〜あ
今〜何〜も〜は〜な〜も〜思〜ま〜砂〜ほ〜の

えれ神なる相生の夫婦と現〜
さ〜た〜と〜あ〜り〜し〜き〜や〜あ〜の〜名〜
れ松のあ枝を〜し〜て〜あ〜の〜心〜た〜の〜き
ま〜も〜あ〜り〜た〜せ〜と〜あ〜も〜あ〜も
わの大君の園あれ〜は〜ま〜ても〜あ〜う〜代
乃住者ま〜え〜ゆ〜と〜あ〜れ〜あ〜う〜あ〜ら
あ〜と〜あ〜夕〜涼〜の〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜の〜あ

舟さうちのりまて返風よまうせはく沖
のさく出まうわ沖のかく出まう
高砂や水浦あま帆をあけて
月さくまもせーか浪の法路乃
鳴くわささちま島尾の沖さくわ
住のまもあまあま住のいかに
あまのまもあまあまあまあまあま

まみりの岸乃松松く世をぬ
らさくまーと君ハまもまもあまあま
のくーま代これ神かまのあまのあま
拍まもまもあまあまあまあまあま
あまあま西の海あまあまあまあま
るより 題られ出住りにあまあま
まあまのあまあまあまあまあまあま

おなる岩陰の松根を倚く腰を
きれを 千年の緑をみたり
梅花を折く首なき勢ハ二月の
雪なきおひカサカサ有難の影向やジャく
月をみよりの神あそびこけ紙
おむあ〜のまよふま〜くは疎
ねの〜もさ〜なり位のえ乃松

陰を〜の松なる青海波ハ是を
らん 神と君とのちらすふ教の
まよ行ゆるハ ちそ還城樂の歌
きて万歳の少心夜刻さ〜ハ
みる悪魔をさ〜とあ〜るまよ
壽福をい〜た千秋樂ハ民をた〜て
萬歳樂を〜のち〜の相を〜松

風きくくのゝきさたる〜
くは静うきのみき

田村

早稲三入

未 此の都路満てゆく九重に

あまのさよ 岸の東國方より来る

僧より我まをさかすらば

あまのさよ 影を長あまのさよ

あまのさよ 影を長あまのさよ

日乃雲せまふも 雲羽山流の雲

色静なる清き水に流るる水に似たり

花の香も水に流るる水に似たり

水は清き水に流るる水に似たり

なるも水に流るる水に似たり

の名所多し水に流るる水に似たり

様も水に流るる水に似たり

のまじりも水に流るる水に似たり

三身は秋の月も清く水も清く

千早振袖の衣も清く水も清く

白妙の雲も霞も水も清く

くつれ様の梢も水も清く

八重の葉も九重の葉も水も清く

花の香も水に流るる水に似たり

水は清き水に流るる水に似たり

と一に「旅」の觀中をよみたるか
整へたる可憐何の如きやうき
の光ならむとやと行くにみる
けははらむぬ觀者の佛像光
明赫々として照る冷や又もとの本
向かう灯の影はな見えどあや
めづりて見せしむ一人の老翁あり名

乗て行く我は是行家居士と云う
うまはたぬは信じて百歳也は女は
有て一人の檀那をもち大伽藍を建
きたる一とてこそあはれとてあ
きぬげしや世とくかきわたるま
坂どの田村丸別伽藍を建てて
お仏像と作るよとて都安全の尊

容とさう。然れど行敷居をいふ
観音菩薩壇の口再返又旦那さま
か。一果は上の田村丸。今も其名
は焼かして清きもの。おれも
いふ。中平は。中平は。中平の
誓い。編んで。國が。美代。編んで
大衆の影と。有難き。安樂寺

界。今。此。安樂寺。主。現。て。釈。の
う。層。の。観。世。音。作。も。愚。なる。下。也。
當。寺。は。其。歴。の。由。を。い。ふ。ぬ。也。
見。て。さ。う。な。ら。ば。音。名。を。い。ふ。と
た。と。音。名。を。い。ふ。と。音。名。を。い。ふ。と
さ。う。な。ら。ば。音。名。を。い。ふ。と。音。名。を。い。ふ。と
見。て。さ。う。な。ら。ば。音。名。を。い。ふ。と。音。名。を。い。ふ。と

あれは清園寺の寺の中も今熊野迄
残るはくたへして又早より山あり
はくも塔婆のたふたふりたる
昔もあつてあれはくたへ警尾
の昔も先は後きよ音羽の山は峰よ
まもつて月の輝きさけ花の梢
はくも風色さくはくもはくも

事なれ 早もつて 是れを 暇惜なれと
心なまじなるよ 時 けり せし
惜もく 昔も 一刻直千金
花は清香月影 真千金も
くも 今 けり 月 影 しく 面
の地をれをわが家 桜の本間より
まもつて 月の輝きさく 後きよ 後きよ

花とははやく散る心なるし
さ客よりおのちのちたきり
時めき 粧ひ青陽の陰緑
風長用なる音羽の籠の白糸
及びわくても面白やを粧や
主権現の花の色をとり
頼め標茅原のさをも
我世中

又あゝん限りハのほ
物と清水のそらもさす
乃 粧ひ 枯るもあつた
粧ひ 何きの春もあ
ま影ハ有明れ天を
のましくあつた
氣さよらふ

の其名いふあか入からんやんかんと
いふか其名を白雪の海鏡をきん
けきんぬる方とて給くうか
こあーかまのまちうきか
のきんをきぬ中々
あくを思ひ給く新行かん
とて地主権現れは前より
も

みりうきりいきて坂の上は田村
堂の軒をわ月れは戸を
明て内なるを給ひたる内陣
いせ給ひたる夜もきん
楼の陰を居てく花をぬある法
の道迷さぬ月れあつた彼法
經と讀誦するに山經と讀誦する

後三行
あゝ面白の折あゝあ地主権現の
光留清水寺に龍津浪あゝ河
の流きとくんで他まの縁ある旅人
河をわきよひ夜声の待浦是る別大
意大慈の観音擁護に直道なるを
少ワまあ花のさよふらひて其
様まよひ男狎の甲冑な書

是は人皇五十一代平城天皇の御宇
まあり一坂のよれ田村丸東夷をたい
らけ悪魔却きりあ天下を平に忠勤
だうも別當寺に佛力あり
君の宣旨ある勢別鈴鹿に悪魔を
はらふ都鄙安全よたすしとの

作しるは依りて軍を兵をとりての既に越す時を
よりりくして觀音の佛前にまり下り祈る
念を致し立願きま石思漸を
瑞驗あらなれる日には新長微笑の頼まを
を受て急ぎ凶徒を討つる心をきりか
普天の下草をたり内何く地をありし
まりがせて名をおの國のたらして

逢坂の山を越える浦浪を舞はり
毒やひろの石山寺をあらまりま
是も清水の一仏を頼まりあらまりに
路を津田の古橋をたり馬を足し
なまりあらまりし既に伊勢河の山を
ちりく馬の足をたりきんとらる
色をきり梅の枝の花をあらまり

色めきく 猛きく あり ぬり ちも
本を我大君の神國の元來觀音
のほけきく 佛力とて 神方も 観
ふあすし とも あり なる あり たり
康の 珍寶の 正統の 代に あり たり
嘉例たり あり あり あり あり あり
鬼神の あり あり あり あり あり

本千草 動搖 あり あり あり あり
國とて 千方とて あり あり あり あり
鬼を土地と侵す 天界とて 千方
捨る あり あり あり あり あり
下も 同とて あり あり あり あり
伊勢の あり あり あり あり あり
鬼神の あり あり あり あり あり

千騎は身をまきして山のほとけに
みしたる所カサあねをえよしき
るカサかた軍兵の旗れに
千手観音の光をたなひて
空をわたり千ね千手とん大慈
の弓みり智恵の光をたけし
らしたまはしてよの世を雨あま

かりつゝ鬼神の勢を乱せ
まカサるカサとくをまきたまはし
鬼神を誅するカサ有難
ありかた誠を呪咀諸毒薬
会彼観音の力を合せて身退き
中人身還カサ持奉人カサれカサは
はしるは観音の佛力なり

東北

羊角三入深

年々海のまきも花も日立海の春

なまや花のたよりのあまき 是也

東國方より出ぬ僧みくし我未

都をたすむ程も女ま田んさ教人

のほり作草春日さかた殿の園城と

朝越てくさるるなまきの武蔵

野をふりつる疎花は又その
雲をぬく教はなほつるも
まそのとちかき後くぬぬ梅は

和泉式部は植置路の依て花の
名を和泉式部とせしむる也
昔の書は色香妙なり花
盛あし雨白のしるけ人の行

を作候そかし早人の教梅は人の
同く和泉式部と申ふはよ眺入る也
昔のしるしをいはる梅の名は
あふあふの鶯お梅なるは
あふあふのあふあふあふあふ
あふあふのあふあふあふあふ
あふあふのあふあふあふあふ
あふあふのあふあふあふあふ

方丈は西のしまを付しつゝの卒ちけ梅
却梅置軒端の梅と名づけしつゝれを
す能女流のころなりまも好たよ
花の縁は短きも傍浦の縁は縁
の正和堂なる一景なり和泉
式部に載置しつゝ軒端の梅と
し早とるみ梅は和泉式部の梅

絵の軒端の梅や又方丈の西
つゝ和泉式部の梅は軒端の
梅なり中へは梅は軒端の梅
なり和泉式部の梅は軒端の
梅なり今もなき名残也
同く梅の名を梅と名づけしつゝ

あさよ夕紅の花に陰よこくはて
みこしき本港きてたふらなりのみなり
夜もまの軒その梅に陰よあそぐ
花も妙ある法のる味らぬ月夜と
よした彼に短と讀み通すまけに短と讀
通する^{後下}有靴の短やあそを
難の短に成れ只今讀み通す路の

譬喩品よの思ひ出せりけ奉りよ
東門院の位を給り一時に堂に圓白
女に前とあり路のよに車に肉みく
法に短の譬喩品と高きうま讀み通
給りよと折る式部女に短の教りよ
圓て門の外法に車の青きけ八靴を
火宅と出ぬいひあそむるにけり

一 事今の新うら思ひ出らば
と也 早 多にけしきと和泉武部は海音
うと田舎はも同なり也 海影
のらたへか宅とんか出らるわ
申したまはか宅を出ぬ吉あらうと
墨元の甚密として清く奇縁の
菩薩とあらう 猶も昔は田

の 出らる宅 今そ 昔てり
三男の毎安の内とあつて川のほと
法たるをいかに宅の口を今そ
和泉武部の成お正覺とてあそる難
ま 支和あつといふも 養心院法の
好文より 適後せよとて 者之
た 教のいありと 費之をいれ

東

ナ

を書き記したるは、
紙動し鬼神を感ずるなり
神明佛陀の真感ありける時
ある世の教書并たまの巻もきき
心を種たりしは、
雨の九重に東の異地を王城の
鬼門を尋ねし思ふは、

水上の山陰に、
も満ちてしるは常樂の縁を
もたす、
は海中の樹僧の教く月下の
教くの袖とほりぬ裳と染て
有様なるは花の教なり
法の教く、
東

日夜朝暮よたつた九夏三伏は夏
 へけて秋まてきりも響る洞窟の
 松は風一帯の秋を催して上秋書
 提の機とを池水より月影の下
 他衆生の相を得しう東水陰陽を
 時をきりきりきりきりきりきり
 の舞 春の夜乃鬘るあまの梅は花

色こそよきあまの梅は花
 くるもよきあまの梅は花
 く昔もよきあまの梅は花
 らゆもよきあまの梅は花
 人のよきあまの梅は花
 是は春の鬘るあまの梅は花
 是人よきあまの梅は花

日下
是文を好むはなるし 唐のころの
清時代の文學なるはなれき花の色
をましく匂ひをさうみちく梅
風四方の薫りなる 是までなりけ
花の根よ鳥を古巢のゆりて方丈
の灯を火宅を指入のこゑを
花の基よ 和泉部より

方丈を室子入ると思へるは
きり刀を流るるをみるは

櫻川

男泊

是ハ東國方の人高入ふハ秋後程ハ
 荒業日可いさうハおちまて買をてら
 きのりまゝ暮なるに何いふもなきま
 なき人來り流りぬりぬりぬりぬりぬ
 られたら買をてらぬ人の住むハ櫻の
 馬場の西にて櫻子の母の葬て是な

櫻

Handwritten text in a cursive script, likely a personal letter or diary entry. The text is written in a fluid, connected style with some small annotations above certain characters.

Handwritten text in a cursive script, similar to the first page. It appears to be a continuation of the same text or a separate entry. The script is consistent and well-practiced.

たるぬ梅の千度百千鳥花の列り
 あゝかゝるあまの草まはれて
 雲さあそびあそびあそびあそび
 ちかみくもくまのさかたなるか
 おひの海一様川の浪うけてる陸
 帯のくもともたつらふあまのあま
 なか〜と水とたれたあまのあま

波の花のさかたあまのあま
 なか〜と水とたれたあまのあま
 春の花をたつ風あまのあま
 あまのあまのあまのあまのあま
 桜のあまのあまのあまのあま
 花のあまのあまのあまのあま
 風花

花

野寺

早山 筑波

露けきたもあけぬた玉

あけぬたもあけぬた玉

山よと出ぬ客僧みく作新大峰

昔城のまゝとあるより唯今大和路

小懸下社 寺の若くはあけぬた玉

ふる即富の起別床の残りも今

寺

寺

心マコトきる水ミヅを鏡カガミと云イハふ

兩説ニイハシいふ事コトを謂イハふ野ノ守ノリ其ソノ名ナを

水ミヅと云イハふ事コトを謂イハふ

正流マサナガよりヨリ水ミヅを鏡カガミと云イハふ事コトを謂イハふ

水ミヅを鏡カガミと云イハふ事コトを謂イハふ

波ナミのミヅを鏡カガミと云イハふ事コトを謂イハふ

水ミヅを鏡カガミと云イハふ事コトを謂イハふ

あゝアハなるナリ事コトを野ノ守ノリと云イハふ事コトを謂イハふ

水ミヅを鏡カガミと云イハふ事コトを謂イハふ

鏡カガミを野ノ守ノリと云イハふ事コトを謂イハふ

謂イハふ事コトを野ノ守ノリと云イハふ事コトを謂イハふ

水ミヅを鏡カガミと云イハふ事コトを謂イハふ

水ミヅを鏡カガミと云イハふ事コトを謂イハふ

水ミヅを鏡カガミと云イハふ事コトを謂イハふ

ふいば夢も事もしるさるるは驚の
行方もあつたはまの事ね有る
彼翁もねさして早なるおれ底まは
たうれさもと争う水の底まは鷹の首
なまいて将人たるよりて見えぬ
正敷お底院 強 あまもみくしてきくぬ
の 切 能く 内 能く 外 本下れ水より

後 一 影 二 影 三 影 四 影 五 影 六 影 七 影 八 影 九 影 十 影
野 一 野 二 野 三 野 四 野 五 野 六 野 七 野 八 野 九 野 十 野
金 一 金 二 金 三 金 四 金 五 金 六 金 七 金 八 金 九 金 十 金
野 一 野 二 野 三 野 四 野 五 野 六 野 七 野 八 野 九 野 十 野
野 一 野 二 野 三 野 四 野 五 野 六 野 七 野 八 野 九 野 十 野

鬼神の位を極く壞れ前より肝膽を
くたいてのりきつては功を積
む其法も乃神あり鬼神の鏡
南無歸依佛後世の法有難や天地成る
ころ鬼神を感ずる目下山河
草木も一仏の道に法味をうけて

鬼神の横道はもろく野寺の
鏡は死をとり夢を打たぬ
屋の面をうつる鬼神の
光はさむく鬼神の
給の如く鬼神の
まの智鬼神も人使の
まの神

うま 法味フツミふらり 結ムスりて 善ツキむ
て 救スツク珠スを 劫クワきて 大オホ嶺リの 雲クモを
凌トぎ 年トシ行ユクの 功イサメを 法フツも 千チ
炮ハツ筒ツツ日ヒ屢ル身ミ命ノチを 劫クワま 換カ気キの
水ミヅの 味アジを 得トクす 一ヒト輪リン伽ガ羅ラ二ニ制セイ多タ迦カ
三サン子ジ俱ク梨リ伽ガ羅ラ七シチ大ダイ金キン剛コウ童トウ子ジ
東トウ方フウ降カウ三サン世セ明メイ王ワウを 此コノ鏡キョウ子ジ

ふらり 又マタ南ナン西セイ方フウを つツき 一ヒト面メン
玲レイ瓏ロウを 明アキラく 天テンを 法フツ世セを 非ヒ
相ソウ非ヒと 相ソウ天テンと 一ヒト面メンと 相ソウ又マタ大ダイ地チ城ジョウ
か 又マタ先マツ地チ獄ゴク道ダウ 先マツハ 又マタ一ヒト面メン
の 有ア様ヤウを 一ヒト面メンハ 又マタ乃ノチ淨ジヨウ玻ハ璃リ
若ニホ鏡キョウと 又マタ一ヒト面メンハ 又マタ罪ツミハ 輕ケイ重ジュウ罪ツミ人ニン若ニホ呵カ
責ツク亦モト也ヤ 鉄テツ杖ジョウの 劫クワきて 一ヒト面メンハ 又マタ一ヒト面メン

予

乙

255
154

著作權所有

明治四十一年七月廿七日印刷
明治四十一年七月廿一日發行

著作者

金 春 七



發行所

江島伊兵衛



發行所

梶屋謡曲書肆

同市同町同番地

東京市日本橋區通四丁目七番地

奈良市東城戸町三十八番地

なを扱ふる鬼神子横道を正す明
鏡の寶あれすも地獄に陥るうと
て大地をうつも踏あし大地をう
ちとさき破りくたさくたをう入
みり

